

# 教 育 研 究 業 績

氏名 茂呂 雄二  
学位 博士（教育学）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学	発達、教授法・学 習、学校・学級・教師	
主要担当授業科目	学習・言語心理学、心理学研究法Ⅰ・Ⅱ、心理学実験A・B（臨床心理学科） 発達心理学特論（心理学研究科）	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1) 授業の実践	1)平成6年4月1日～令和3年3月31日	1)筑波大学人間学類において言語心理学演習、教育心理学等を担当し受講生の学習に効果があった。
2) 授業の実践	2)平成7年4月1日～令和3年3月31日	2)筑波大学心理学研究科博士課程言語心理学特講等を担当し受講生の学習に効果があった。
3) 授業の実践	3)平成16年4月1日～令和3年3月31日	3) 筑波大学修士課程教育研究科において学級と学習の心理等を担当し受講生の学習に効果があった。
4) 授業の実践	4)平成19年4月1日～令和3年3月31日	4) 筑波大学人間学群心理学類において学習心理学、学習心理学演習等を担当し受講生の学習に効果があった。
5) 授業の実践	5)平成30年3月～令和3年3月31日	5) 筑波大学人間学群心理学類において学習・言語心理学を担当し受講生の学習に効果があった。
2 作成した教科書、教材 2 作成した教科書・教材 ①スタンダード学習心理学（編著）	平成30年3月	青山征彦との共編著、近年の学習心理学の動向を解説する、新しい教科書である。1920～30年代に旧ソ連において活躍し、近年再評価も著しいヴィゴツキーの方法論に影響を受けた著者陣が、その研究成果を余すところなくまとめた学習心理学の新しい教科書である。これまで、主に動物を研究対象としてきた学習を、行動ではなく活動を視点とすることで、複雑さをもった「人間の学習」としてとらえ直し、その「在り方」や「成り方」、さらに遊びのもつ可能性といった視点を中心に論じた。
②発達と学習（新教職教育講座第7巻）（編著）	平成25年12月	櫻井茂男との共編著。第2部学習編を編集し「学習の基礎」を執筆した。本書にはコミュニティを横断する学習；教授と学習；生涯にわたる学習；高齢者のための学習・教育デザイン；新しい共同学習；学校と教室のしくみ等をおさめて、最近の状況的学習論を中心とする、あたらしい学習心理学研究の動向を解説した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		特記事項なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項		特記事項なし
5 その他		特記事項なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		特記事項なし

2 特許等			特記事項なし	
3 実務の経験を有する者についての特記事項			特記事項なし	
4 その他	平成 29 年 2 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日		茨城県いわき市いじめ問題調査委員会委員長	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 人はなぜ書くのか	単著	1988 年 1 月	東京大学出版会 (認知科学選書 16)	幼児期の書き言葉の始まりから、青年期の文章表現、成人非識字者の文字の修得家庭に関する研究・ドキュメントを総覧して、書き言葉の意味、文字を利用する活動の意味について論じた。
2 音声と文字のあいだ	単著	1990 年 5 月	佐伯胖・佐々木 正人編 『アクティブ・マインド：人間は動きのなかで考える』 東京大学出版会	通常対立的に捉えられる、書き言葉と音声言葉の間の、複雑な関係性を論じた。
3 語り口の発生：言語の活動理論	単著	1991 年 2 月	無藤隆 (編) 『言葉が誕生するとき』 新曜社	言語の発達過程を、通常の観点である言語 (言語体系) の習得の観点ではなく、語り口 ways with words の視点から見るとどうなるかという試論を展開した。
4 読み書き能力の発達	単著	1992 年 6 月	東洋・繁田進・田島信元編 『発達 心理学ハンドブック』 P618-624 福村出版	子ども達の読み書き能力、リテラシーの発達過程、ならびに教育課程の研究の現状をまとめて論じた。
5 語ること・語らせること	単著	1993 年 11 月	海保 博之・原田 悦子 (編) (1993). 『プロトコル分析—発話データから何を讀みとるか』. 東京：新曜社.	プロトコル分析を相互行為分析の視点から論じた。発話されたデータを記録して、事後的に分析するプロトコル分析にも、相互行為として、話し手=聞き手関係の中で次々と作られる活動の状況性に留意すべきことを論じた。
6 ZPD から LPP へ：開け ZPD	単著	1995 年 6 月	福島真人 (編) 『身体の構築学：社会的学習過程としての身体技法』, 457-512, ひつじ書房	従来教授者視点で描かれることの多かった発達の最近接領域の概念を、学習者と教授者の相互作用、関係性構築の動的な観点から論じた。
7 読み書きの具体性から	単著	1996 年 12 月	佐々木正人編 『心理学のすすめ』 ちくま書房	心理学初学者に向けて、ごく当たり前の行為と見られる読み書きに注目すると、どのような心の理解が可能になるか、幼児の読み書きの始まりの次期を例にして論じた。
8 談話の認知科学への招待 (1-20) 発話の型 (47-78)	単著	1997 年 12 月	茂呂雄二編著 『対話と知』 新曜社	認知科学や文化人類学, 言語学, 教育など幅広い分野で注目を集めるようになってきた談話分析への招待。表面的な会話の裏に隠された心理的やりとり, 言葉と身体の響

				き合い、文化と談話の関係性等を明らかにする手法を実際の事例を示して解説した。
9 The expanded dialogic sphere: Writing activity and authoring of self in Japanese classrooms.	単著	1999年1月	In Y. Engestrom, R. Miettinen, & R-L, Punamaki (Eds.) <i>Perspectives on Activity Theory</i> . Cambridge: Cambridge University. (pp. 165-82)	児童の作文・文章産出活動を、社会文化的アプローチの観点から論じた。特に教室の社会的共同性に基礎を置く、日本の作文教育の特徴を明らかにした。
10 具体性のヴィゴツキー	単著	1999年8月	金子書房 シリーズ認識と文化6	ヴィゴツキーの理論を選考するマルクスやスピノザの哲学的なアイデアを継承する考え方として、特に具体性、胚細胞、全体性のアイデアから読み解いた。
11 ヴィゴツキーの具体性のアイデアとその相互行為的拡張	単著	2000年3月	博士論文(東京大学、乙第14591号) 国立国会図書館 DOI: 10.11501/3191012	ヴィゴツキーの核心にある具体性のアイデアを、学習研究で活用する総合行為分析の方法論にインプレメントすることで、新たに開ける研究面でのパースペクティブを論じた。
12 具体性と実践の描出	単著	2001年10月	茂呂雄二(編著) 『実践のエスノグラフィー(シリーズ状況的アプローチ3)』 金子書房 pp.22-58	人々の日常生活の中の状況的認知過程を適格に描くための方法基準を、哲学的概念である“具体性”の観点と関連づけて論じた。
13 心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ	共著 翻訳	2004年5月	福村出版	J. Wertsch (1991). <i>Voices of Mind</i> . Harvard University Press. (茂呂雄二・田島信元・佐藤公治・上村佳代子共訳) ヴィゴツキーの考え方とバフチンの言語哲学を補完し合う思想として論じるアイデアを日本の読者に紹介した。
14 実演家が学校にやってきた—和楽器授業ガイドブック	共著	2006年6月1日	佐野靖・茂呂雄二(監修) 日本芸能実演家団体協議会・芸能文化振興部 編 『実演家が学校にやってきた—和楽器授業ガイドブック』 丸善出版事業部	「芸団協」による和楽器モデル授業「出前教室」プロジェクトの成果と課題をまとめたガイドブック。立場の異なる実演家、教師、コーディネーターらが互いの専門や考え方をクロスさせながらよりよい実践を求め続けた学びの記録。
15 談話の進行と状況の定義が作るダイナミクス	共著	2006年12月	能智正博 編 『(語り)と出会う：質的研究の新たな展開に向けて』 ミネルヴァ書房	朴東燮, 茂呂雄二 幼児の遊びにおける談話の進行と状況の意味付けの変化を論じることで、質的研究法が、時間系とともに進行する意味付けの過程に注意を払うべきことを論じた。
16 活動の心理学—歴史と未来	単著	2008年2月	田島 信元(編)	文化心理学の中で、ヴィゴツキーに由来す

			『文化心理学』朝倉心理学講座 11 朝倉書店 4 章	る活動の概念が、どのように発展し、今後どのような研戦略となるべきかについて議論した。
17 社会的なもの—学習研究における質の探究	単著	2008 年 4 月	無藤隆・麻生武（編）『質的心理学講座 1 育ちと学びの生成』。東京大学出版会	学習が社会的実践だとする状況的学習論を進展させるには、社会的で在ることの意味を明らかにする必要がある。そのために、スピノザの集合的でマテリアルな社会論を導入して、心理学的な社会性を明らかにした。
18 Spinozic reconstruction of the concept of activity.	共著	2009 年 6 月	In A. Sannino, et al. (Eds.), <i>Learning and expanding with activity theory</i> . Cambridge: Cambridge University Press. (pp. 176-193)	Kagawa, S. & Moro, Y. (2009) 人々の感情的な集合活動に関するスピノザの議論を援用して、ヴィゴツキー派の活動の概念を再定式化した。
19 ヴィゴツキー心理学のアクチュアリティ	単著	2011 年 8 月	茂呂雄二・田島充士・城間祥子（編著）『社会と文化の心理学—ヴィゴツキーに学ぶ』, 世界思想社,	心理学における社会文化的アプローチの重要性と、ヴィゴツキーのアイデアを活用した新しい心理学の構想の必要性について議論した。
20 ワードマップ 状況と活動の心理学—コンセプト・方法・実践—	共著	2012 年 4 月	茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介（編）『ワードマップ 状況と活動の心理学—コンセプト・方法・実践—』, 新曜社 1-331 頁	茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介と共編。状況的学習論、活動心理学ヴィゴツキー心理学に関する、コンセプト・方法・実践等の項目について、解説した。
21 学習の基礎	単著	2013 年 12 月	櫻井茂男・茂呂雄二（編）『新教職教育講座 第 7 巻 発達と学習』, 協同出版, pp.131-144	第 2 部学習編を編集し「学習の基礎」を執筆した。本書にはコミュニティを横断する学習；教授と学習；生涯にわたる学習：高齢者のための学習・教育デザイン；新しい共同学習；学校と教室のしくみ等をおさめて、最近の状況的学習論を中心とする、あたらしい学習心理学研究の動向を解説した。
22 遊ぶヴィゴツキー：生成の心理学へ	単著 翻訳	2014 年 9 月	新曜社	L. Holzman (1998) <i>Vygotsky at Work and Play</i> . New York: Routledge. の翻訳である。原著者のホルツマンのパフォーマンスに起点をおいた新しい発達論、学習論を紹介するために翻訳した。
23 インプロをすべての教室へ：学びを革新する即興ゲーム・ガイド	共著 翻訳	2016 年 5 月	新曜社	C. Lobman & M. Lundquist(2007), <i>Unscripted learning</i> . New York: Teachers College Press. の翻訳である。子どもの学力をどう向上させるか、教壇から授業するだけでは、いくら工夫をしても限界がある。いま先端的な企業では、イノベーションをもたらす「集団的知性」が合

				い言葉になっている。教室も同じで、子どもたち全員を巻き込んだ、集団的な学びが重要である。それを可能にするのが、即興的にパフォーマンスするインプロゲームであり、本書は、さまざまな教科を創造的に学ぶ、教室で使うために周到にデザインされたインプロゲームを100以上も載せた解説書である。
24 発達の社会・文化・歴史的アプローチ：ポストヴィゴツキー研究の現代的意義	単著	2016年7月	田島信元、岩立志津夫、長崎勤編『新発達心理学ハンドブック』7章 福村出版	1980年代以降のヴィゴツキー派の研究動向をレビューし、その心理学上の意義を議論した。
25 人間の学習	単著	2018年3月	青山征彦・茂呂雄二共編『スタンダード学習心理学』サイエンス社	人間の学習過程に関する、最新の知見を初学者にも分かりやすく解説した。1920～30年代に旧ソ連において活躍し、近年再評価も著しいヴィゴツキーの方法論に影響を受けた著者陣が、その研究成果を余すところなくまとめた学習心理学の新しい教科書である。これまで、主に動物を研究対象としてきた学習を、行動ではなく活動を視点とすることで、複雑さをもった「人間の学習」としてとらえ直し、その「在り方」や「成り方」、さらに遊びのもつ可能性といった視点を中心に論じた。
26 パフォーマンス心理学とはなにか	単著	2019年3月	茂呂雄二・香川秀太・有元典文（編著）『パフォーマンス心理学：共生と発達のアート』新曜社	パフォーマンス心理学におけるパフォーマンスの考え方、パフォーマンス心理学の歴史、研究および教育実践での実際の応用例を紹介して、パフォーマンス心理学への誘いとした。
27 パフォーマンス心理学入門：共生と発達のアート	共著	2019年3月	新曜社	茂呂雄二・香川秀太・有元典文（編著）
28 即興パフォーマンスと発達	単著	2019年1月	赤木和重（編著）『ユーモア的即興から生まれる表現の創発—発達障害・新喜劇・ノリツッコミー』クリエイティブかがわ	パフォーマンス心理学を紹介した後、特別支援教育の2つの実践事例を、パフォーマンスの観点から評価して、論評した。
29 みんなの発達! —ニューマン博士の成長と発達のガイドブック	共著 翻訳	2019年3月	新曜社	F. Newman & P. Goldberg (1994) <i>Let's Develop!</i> New York: Castillo International. の翻訳本である。 茂呂雄二・郡司菜津美・城間祥子・有元典文共訳 哲学者ニューマンの社会的グループ療法の実践に基づいた、人々の成長のためのガイドブックである。
30 「知らない」のパフォーマンスが未来を創る：知識偏重社会への警鐘	共著・編訳	2020年11月	ナカニシヤ出版	L. Holzman (2018). <i>Overweight Brain</i> . East Side Institute Press. の翻訳である。第6章を翻訳した。
31 日本語読者に向けた前書き	単著	2020年11月	ナカニシヤ出版	『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る：知識偏重社会への警鐘』の読者に向けた解説・前書きである。

32 パフォーマンスアプローチ心理学：自然科学から心のアートへ	共著・編訳	2022年11月	ひつじ書房	Newman and Holzman(1996). Unscientific Psychology. Praeger.の翻訳である。
33 解説「パフォーマンスにもとづく心のアートの意味」	単著	2022年11月	ひつじ書房	『パフォーマンスアプローチ心理学：自然科学から心のアートへ』の解説である。
(学術論文) 1 展望I 幼児の言語獲得に関する研究の動向	共著	1979年3月	教育心理学年報 18, 100-119	福沢 周亮, 高木 和子, 鈴木 情一, 守 一男, 堀 啓造, 茂呂 雄二 1970年代後半までの、世界の言語発達研究をレビューし、発達分野ごとの動向を明らかにした。
2 児童の文章産出一短作文における文脈形成分析の試みー	単著	1982年3月	教育心理学研究, 30(1),29-36	短作文による文脈形成作文法を開発して、どのように年齢とともに、文と文を繋ぎ合わせるのか、その違いと背景にある認知機序を明らかにした。
3 児童の作文と視点	単著	1985年12月	日本語学, 4(12), 51-60.	児童の作文、文章表現における、視点取得の重要性を、具体的な事例から明らかにした。
4 教室談話の構造	単著	1991年10月	日本語学, 10, (10), 63-72.	教室における児童・生徒と教師の相互行為を分析する視点を、教室談話研究のレビューに基づいて論じた。
5 書きことばの使用と言語の発達	単著	1992年4月	言語, 244 (1) 特集『子どもたちの言語獲得・ヒトはどのようにコトバを手に入れるか-』	文字を習得するとともに、子ども達の言語活動全般にどのような変化が生じるのかを論じた。
6 仮想視点からの作文	単著	1992年3月	国立国語研究所研究報告集 (13),123 - 164	児童の作文過程を認知科学的に解明し併せて作文過程の改善を目指すために理論的な吟味とそれに基づく調査および実践を行った。1) 作文過程を特定の相手に向けた発話過程として見直し、教室における作文過程をより有意味にするための方法として、子供たちに仮想的な他者視点を取らせる「誰かになって書く方法」を提案した。
7 日本語談話研究の現状と展望	共著	1993年3月	国立国語研究所研究報告集 (14), 245-280,	茂呂雄二・小高京子 第1部では日本語談話研究の現状を展望して、それぞれの研究が指向する方法論の違いを取り出してみた。第2部には日本語談話に関する研究の文献目録を収めた。研究指向の違いは以下の通りである。①「記述的指向」と「応用的指向」②「分析者視点」と「談話当事者の視点」③「ことばへの注目」と「ことば以外への注目」④「主体＝規範指向」と「社会的関係性指向」⑤「現実・秩序指向」と「変化・多様性指向」。
8 言語と思考：Vygotsky 理論の立場から	単著	1994年7月	信学技法 TL94-6, 1-8, 1994 一般社団法人電子情報通信学会	Vygotsky の社会文化的アプローチの核心は、システムの全体性、媒介された行為論、そして精神の社会的構成論の三点に要約できる。Vygotsky に従えば、思考と言語とは、統一性をつくる、状況的な言語行為あるいは談話行為となる。しかしながら、この状況的な談話行為の構造は明示されていない。それがどのような慣習的实践からなり、どのような多様性をもつものなから明らかではない。Vygotsky 理論を発展させるためには、この状況的な談話行為の内的な構造を明らかにし、他の談話行為との間テクスト的

				関係を明らかにする、綿密な分析を構想することができる。
9 「書きことば」と「話しことば」のインターフェース	単著	1995年2月	言語, 279(1),	日本の子どもの言語発達について、話し言葉と書き言葉の絡み合い、関係性を見ることが重要なことをといた。
10 対話する身体のアーティファクト：Vygotskyの相互行為論的拡張	単著	1996年5月	認知科学, 3(2), 25-35	教室談話資料の相互行為論的分析から、発話ならびに身体的な、様々な手がかりが、授業の進行や拡散、収束に大きな役割を果たしていることを明らかにした。
11 教室の声のエスノグラフィー—授業の談話分析の課題—	単著	1997年3月	日本語学, 16(3), 4-12.	教室談話分析の課題を、ミハイル・バフチンの声の概念の視点から論じた。
12 言語的相互行為のステータス—：談話の認知科学的研究	単著	1999年10月	日本語学, 18(11), 57-67	学習過程の理解のためには、言語的相互行為研究の分析視点が重要であることを論じた。
13 意味の伝達のあり方—ヴィゴツキーの試みの復元—	単著	1997年11月	日本語学, 16(11), 15-24.	意味の伝達に関してヴィゴツキーが言わんとしていたことをすご行為の観点から復元しようとした試論。
14 活動と文化の心理学	共著	2000年7月	心理学評論, 43(1), 87-104	青山征彦・茂呂雄二 活動の概念を、培地としての文化、他者生としての文化の2つの文化概念から明らかにした。
15 ことばの発達と方言—心理学からのアプローチ	単著	2001年1月	言語, 30(11), 82-87.	幼児・児童の言語発達における方言と共通語のコードスイッチング現象の重要性を、庄内方言の資料から論じた。
16 仲間との協力と問題解決—協力の過程分析—	共著	2001年3月	筑波大学心理学研究, 23, 35-44	朴東燮・茂呂雄二 幼児の推論能力の発達に対するピア相互作用の影響を議論した。120名の幼児に対して、事前テストののち行った同輩との相互行為の影響を見た。単により良くできる子どもとの相互作用が、成績の伸張をもたらすわけではないことが明らかになった。
17 ディアログイズム心理学の構想：バフチンと心理学の対話	単著	2002年8月	思想(岩波) 940, 131-148.	ミハイル・バフチン特集号に寄せた、心理学の立場からのバフチン読解。バフチンの議論の対話論も人格論も、心理学における他者理解を促進する者であり、ヴィゴツキーの発達論を保管する者であることを論じた。
18 子どもの想像力と物語授業モデル	共著	2002年3月	筑波大学心理学研究,(24), 151-159.	朴東燮・茂呂雄二 想像力研究の作業課題の特定をした。そのためにまず Vygotsky の想像力の発達に関する議論を吟味する。次に、想像力の活性化の道具として利用可能な物語の教育的メカニズムを吟味する。その特徴を指摘した後、想像力の活性化の道具として使われる物語の教育的意義を検討し、最後に Egan が取り上げている物語授業モデルの枠組みに基づいた実際の授業モデルを提案した。
19 教室環境における言語発達の分析に向けた記述の枠組み	共著	2002年3月	筑波大学心理学研究, (24), 99-110.	伊藤崇・茂呂雄二 言語発達環境の分析枠組みを提案した。特に、家庭から幼稚園へ等の、制度的な移行場面の移行過程を切り出す枠組みを提案した。
20 カットの話し方と談話のモニター	単著	2003年3月	日本語学, 22(2), 24-33.	映像のカットの文法と、談話における複数のイメージの重なりが創る内言を対比して論じた試論。
21 学校活動に関する学習論の検討	共著	2003年9月	筑波大学心理学研究, (26), 53-73.	香川秀太・茂呂雄二 学習の転移に関する心理学理論をレビューした。伝統的学習論、周回の参加理論、活動理論、過程としての転移論を比較検討し

22 素朴概念の理論的再検討と概念学習モデルの提案 —なぜ我々が「分かったつもり」になるのか?—	共著	2003年9月	筑波大学心理学研究, (26), 83-93.	た。 田島充士・茂呂雄二 概念の理解と学習の社会的な構成について論じた。分かっていないのに分かったつもりになる過程に照準して、それが学習者の能動的な解釈を背景をしていることを明らかにした。
23 指導と助言の談話過程	単著	2004年1月	日本語学, 23(1), 6-14.	学習者への指導や助言の言葉が、どのような談話構造のもとになされるかを論じた。
24 Dynamics of situation definition.	共著	2006年1月	Mind, Culture, and Activity, 13(2), 101-129.	Park, D. & Moro, Y. 母子の相互作用プロセスや、子ども共同遊びプロセスにおいて、長く議論されてきた状況の定義の問題に対して、状況の変化の必然性を取り上げて、状況の定義が常に参加者と状況に持ち込まれる事物から発生する状況の揺れとして再定式化し、定義の揺れの観点が持つ教育上の有効性を論じた。
25 科学的概念と日常経験知間の矛盾を解消するための対話を通じた概念理解の検討	共著	2006年3月	教育心理学研究, 54(1), 12-24	田島充士・茂呂雄二 本研究は日常経験知と矛盾する科学的概念を学習した中学生を対象に、両者の矛盾関係の解消を目指した説明を求める半構造化面接を実施し、この中で対立する日常経験知をどのように関連づけるのかという視点から、概念理解の実態を検討したものである。
26 看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成-校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析	共著	2006年3月	教育心理学研究, 54(3), 346-360	香川秀太・茂呂雄二 密接に関連する状況間の移動と学習を明らかにするため、看護学校内学習から周手術期の臨地実習へ移動する看護学生の学習過程を検討した。研究Ⅰの観察では、「校内では、根拠に基づいて看護することの重要性が実感できないが、臨地実習では、その重要性を実感し厳密に実施するのはなぜか。」という問いを設定した。研究Ⅱでは、実習期間終了直後の学生に半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッドセオリーに基づく分析を行い、この学内と臨地の差異の背景と考えられるものの一つを、【時間の流れ】の相違(異時間性)として概念化した。
27 社会文化的アプローチによる道徳性研究の可能性	共著	2006年3月	筑波大学心理学研究 (32), 1-9	道徳性の発達に関する社会文化的アプローチに基づく研究のレビュー論文。
28 中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程	共著	2007年3月	教育心理学研究, 55(1), 120-134.	城間祥子・茂呂雄二 最近中学校に導入された和楽器の授業をビデオ撮影し、相互行為分析して、指導者である、能楽師も、受け入れの中学校も、生徒とともに変化する過程を明らかにした。
29 バフチンの対話性概念による社会心理研究の拡張	共著	2007年9月	実験社会心理学研究, 46 (2), 146-161	朴東燮・茂呂雄二 この論文では、バフチンの対話概念の適用可能性を議論した。まず、バフチンの対話性の概念を概説した。次に、学習発達に関する研究領域の動向を概観して、学習を社会過程と見なす方向に動いていることを確認した。この領域における理論的問題の二つの焦点が、状況の対話組織化と、言語実践のレパートリーのアイディアにあることを特定した。そして、この二つの理論的問題を考える上で、対話性の概念が有効であることを、子どもの相互行為データを用いて例証した。



30 学生能楽サークルにおける仕舞の学習過程：初心者の技能の社会的構成	共著	2007年2月	筑波大学心理学, (33), 9-28.	城間祥子・茂呂雄二 大学生の能楽サークルにおける、大学生の運動技能の学習課程を明らかにした。本研究では、技能学習を「学習者と他者と環境との相互作用を通して、目標の設定や達成がなされる過程」と位置づけ、初心者の仕舞の学習過程を、「どのような目標が設定され、どのように達成されるのか」他者や環境は目標の設定や達成にどのように関わっているのか」という観点から検討した。
31 教育心理研究における質的方法の意味	単著	2007年3月	教育心理学年報 47, 148-158	教育心理学において、近年多数の論文が現れつつある質的研究について吟味した。『教育心理学研究』の掲載論文を中心に、質的研究に関わる動向を振り返った。教育心理研究を内在的に批判した吉田(1989)の論考に基づいて、2つの課題を定めた。第1は、メタ理論の重要性である。質的な心理学研究がどのように実証主義と関連するのかを議論した。第2は、言語的な解釈と記述の問題である。質的研究の言語的解釈は、対話的拡張と縮約の2方向からなり、縮約はいくつかのミニマリズムの指針に基づいて行われることを論じた。
32 イメージとことばのちから	単著	2008年8月	児童心理特集『「言葉の力」を育てる』	言葉のちからの要件としての、想像力やイメージを取り上げて、イメージが社会的な相互行為に根ざすことを論じた。
33 状況に根づいた活動(特集 状況論がひらく看護--インタラクシヨンの精緻な分析)	単著	2008年8月	インターナショナルナーシング・レビュー 31(5), 27-29	看護学研究における状況論と相互行為分析の重要性について解説した。
34 心理研究の方法としての読書—テキスト言説分析の提案—	共著	2009年2月	筑波大学心理学研究, (37), 19-29.	白井東・茂呂雄二 本研究では Gee および Lemke の言説分析を取り上げ、両者のアイテナアを生かしつつ、他の分析者も容易に利用可能な手続きを開発するためにテキスト言説分析を提案した。
35 言語心理学(特集 ことばへのアプローチ 143冊--言語研究のためのブックガイド)	単著	2009年5月	言語 38(5), 56-59.	言語心理学の古典となる書籍を解説・紹介した。
36 小学校教師間ネットワーク分析：相談・被相談関係からネットワークを捉える	共著	2010年2月	筑波大学心理学研究, (39), 1-9.	徳舛克幸・茂呂雄二 教師間の社会的ネットワークに基づく学習と成長過程を明らかにするために、担任教師が人的リソースとして誰を相談相手として選ぶのか、そのネットワークの特徴を探索的に検討した。
37 幼児期の物語理解は養育者にどのように捉えられているか—絵本読み聞かせ活動を中心に—	共著	2011年8月	筑波大学心理学研究, (42), 9-20.	太田礼穂・茂呂雄二 絵本読み過程における、母子の相互行為中に、幼児の行為を母親がどのように意味付けるのか、質問紙調査、インタビューなどで明らかにした。
38 社会・技術的アレンジメントの再構築としての人工物のデザイン	共著	2014年3月	認知科学 21(1), 173-186.	上野直樹・ソーヤーりえこ・茂呂雄二 人々の社会文化的儒教における学習課程を明らかにするには、社会技術的に広がる、人、もの、制度、等の関係性のネットワー

				クを明らかにする必要があることを論じた。
39 船員教育における実習指導者のほたらきかけの検討	共著	2014年12月	認知科学, 21(4), 438-450.	守下奈美子・茂呂雄二 船員教育における、指導者の学習者へのほたらきかけを談話構造の観点から明らかにした。(1) 船舶捜査スキルの各と異に沈黙が増加すること (2) 適度なダブルバインドを生み学習を促進する、からかい等が、教示のスタイルとして利用されることが明らかとなった。
40 合奏練習場面における指導者の働きかけをいかに捉えるか—社会・文化的アプローチの観点から—	共著	2014年12月	認知科学, 21(4), 468-484.	新原将義・茂呂雄二 ノンプロのオーケストラの指揮者が、どのような働きかけで、演奏を仕上げて育いくのかについて、ビデオ観察データを分析して明らかにした。
41 自己への誤帰属はどのようなやりとりの後に生起するのか？—発話の特徴並びに発話連鎖の検討—	共著	2015年3月	教育心理学研究, 63(1), 63-76	太田礼穂・茂呂雄二 子どもが大人との共同の中で、相手が行った行為を「その行為を行ったのは自分だ」と誤帰属する現象がある。この現象の生起は、大人との共同を通じて起こる学習と共起関係にある。それが、どのようなやりとりを行ったときに自己への誤帰属が起こるかを明らかにするために、発話ならびに発話連鎖を分析した。大人の働きかけが登場人物の気持ちに関するもので、それに対して子どもが具体的に応答していたとき、自己への誤帰属が多くなることが明らかとなった。
42 音楽家はアウトリーチ実践をいかに語るか—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた検討—	共著	2015年2月	筑波大学心理学研究, (49), 9-19.	新原将義・茂呂雄二 学校や幼稚園、保育園等で、出前演奏を行っているプロの音楽科にインタビューしたデータをもとに、アウトリーチ実践をどのように意味付けているかを明らかにした。
43 児童・生徒の未来展望尺度の開発及び未来展望と学校適応感との関連	共著	2016年3月	筑波大学心理学研究, (51), 1-8	広瀬拓海・茂呂雄二 学校の外部で子ども、若者達がたむろして、遊ぶ場面を観察し、インタビューすることで、それも重要な学習機会となっていることを論じた。
44 児童・生徒の未来展望尺度の開発及び未来展望と学校適応感との関連	共著	2016年3月	発達心理学研究, 27(2), 115-124	陳晶晶・茂呂雄二 未来への個人の感情・態度が現在の行動に与える影響を、検討することを目的として、研究1では児童・生徒の未来展望尺度の開発を行い、尺度の信頼性と妥当性の検討を行った。結果、児童・生徒の未来展望は「自信」、「心配」、「未来社会への信頼」の3つの下位尺度から構成された。研究2では、未来へのポジティブとネガティブな感情・態度と学校適応感との関連を検討し、自信と心配がともに学業場面における適応感に影響し、未来社会への信頼と心配が友人関係における適応感に影響することが明らかになった。研究3では、小中学校間の移行前後における未来展望の変化を縦断的に調べ、中学入学後の子ども達の心配が有意に上昇し、未来社会への信頼が有意に下がること明らかになった。
45 大学生のサークル活動におけるコミュニティ維持に関する質的検討	共著	2017年2月	筑波大学心理学研究, (53), 13-21.	北本遼太・茂呂雄二 学習組織としての大学生のサークルが、どのようなコミュニティビルディング活動を通して維持されるのか、観察でターゲット

				インタビューデータで明らかにした。
46 この場で発達を作るーパフォーマンス心理学による社会療法	単著	2018年3月	臨床心理学, 特集『発達の視点を活かす』18(2), 208-211.	社会療法(ソーシャルセラピー)という、パフォーマンスを重視する新しい発達論を紹介するとともに、社会療法に基づいた障害者支援のじれから、パフォーマンスに注目することの有効性を論じた。
47 子どもも保育者もパフォーマンスで発達する	単著	2017年3月	いわき短期大学研究紀要(50), 174-183.	保育活動者向けのパフォーマンス遊びを紹介しながら、パフォーマンス心理学の唱える、新しい事柄へのチャレンジとしてのパフォーマンスの重要性を論じた。
47 Reconstitution of socio-technical arrangements: Agency and the design of artifacts	共著	2017年4月	Mind, Culture and Activity. 24(2), 1-15.	上野直樹、ソーヤー理恵子、茂呂雄二 従来整備が進んでいなかった、学習環境を記述するために必要な理論的な枠組みを提案して、それを小学校における総合的な学習の時間の授業実践を事例にして例証した。
48 Socio-Material Arrangements of Impoverished Youth in Japan: Historical and Critical Perspectives on Neoliberalization.	共著	2019年3月	Mind, Culture and Activity, 24(2), 95-109.	広瀬拓海・茂呂雄二 東京足立区における貧困に曝される児童生徒の観察研究とインタビュー調査から、日本における新自由主義化の中で、子ども達を支援するボランティアグループの活動が歴史的に変化する様子を描き、人々の実践活動が子ども達の発達を意味を意味付ける機序を明らかにした。
49 「交換形態論」の再評価と「パフォーマンスとしての交換」への拡張: 学習のアレンジメント形成における感情の役割	共著	2020年4月	認知科学, 27(1), 44-62.	北本遼太・茂呂雄二 福祉施設の設立を可能にする、社会物質的アレンジメントを明らかにした。特に、交換関係を可能にする、間接的な関係にあるステークホルダーや、今後の組織持続を可能にする未来のステークホルダーの重要性を確認した。
50 ギブ・ゲット関係の転換としての発達: F. Newman のアイディアと状況的学習論の深化.	共著	2020年3月	筑波大学心理学研究, 58, 1-12.	北本遼太・茂呂雄二 米国の哲学者の F. Newman の著作における、交換概念を網羅的に抜き出して、累計化した。
51 パフォーマンス心理学と日本語教育: コロナ禍の中で見直す言葉の教育	共著	2022年3月	言語教育実践「イマ・ココ」	言語教育の一旦を、パフォーマンスアプローチ心理学の立場から論じた。
52 みんなで楽しく発達するパフォーマンス心理学入門	単著	2023年3月	モチベーション研究(東京未来大学) 12号, pp.26-38.	パフォーマンスアプローチ心理学の解説。
(その他)				
1 Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity.	共著	2011年9月	<i>Paper presented at International Society for Cultural and Activity Research Congress Rome 2011. September 8, 2011 at Rome Sapienza University.</i>	Shiroma, S., & Moro, Y. (2011). 大阪の公立小学校の総合的学習の時間に行われた、文楽の学習を1年に渡って追跡、関係者のインタビューデータを下にも、学習成立にモノや感情面での交換が重要であることを指摘した。

2 Exercising power through changing the mode of exchange: or as Fred said, “Hey man! You can do better by giving rather than getting.”	共著	2016年9月	<i>Paper presented at Performing the World 2016: Can We Perform Our Way to Power?</i>	Hirose Takumi., Kagawa Shuta, & Moro Yuji 貨幣＝商品交換に代わる、新しい交換パフォーマンスをデザインする、交換ゲームを考案してデモンストレーションした。
3 Disability in Context: Some Considerations on Japanese Cases	単著	2016年9月	<i>An Invited Speech at International Conference on Social Learning and Recovery: Social Life of People with Disability, at Fu Jen University, Taipei. November 25, 2016.</i>	台湾輔仁大学で行われた学会における招待講演。日本における引き込み支援の現場について、茨城県筑西市の事例を分析しながら、日本の現状と課題を論じた。
4 Globalization and socio-historical arrangements of young people’s tracks: Japanese cases.	単著	2017年4月	<i>An Invited Speech Presented at Play, Perform, Learn, Grow: Exploring Creative Community Practices, at University of Thessaloniki, Greece, April 3, 4 and 5, 2017.</i>	日本におけるグローバル化の進展とその影響を、東京足立区での観察・インタビューで論じた。
5 パフォーマンス心理学と協働実践の意味.	単著	2018年8月	第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、基調講演。茨城県立医療大学.	パフォーマンス心理学の立場から、慰労看護老域でトピックと成っている、異職種連携の意味について論じた。
6 Playing with “Let’s Develop!”: Performing Giving in the Culture of Neoliberalism	共著	2018年9月	<i>Paper Presented at Performing the World 2018: Let’s Develop! at All Stars Project Inc., New York City, September 23, 2018.</i>	Hirose, T., Otsuka, S., Kitamoto, R., Moro, Y. and Miyamoto, M. 交換のあり方について新しいパフォーマンスで応じる、「交換コインゲーム」を作成して、学会参加者とともに、ゲームの可能性や意味づけを議論し、ゲームとしての可能性を確認した。
7 Developing School Teacher’s Alternative Performances: Performatory Psychology in Progress. APCESP-0116	単著	2019年3月	<i>Paper Presented at Asia-Pacific Conference on Education, Social Studies and Psychology, March 20, 2019.</i>	Moro, Y., Hamamoto, S. & Raisaka, H. 筑波大学附属学校教育局で進めている、教員の再教育研プログラムについて紹介し、パフォーマンス心理学の意義を論じた。
9 Talent Show and its Impact in Japan	共著	2020年8月9日	<i>Paper Presented at Performing the World</i>	Hirose, T., Kitamoto, R., Moro, Y. 日本におけるタレントショーの開催実績と関連するイベントについて報告した。

			<i>Happening(s) first All Stars International Talent Show.</i>	
10 パフォーマンスの意味	単著	2020年10月25日	日本質的心理学会第17回大会会員企画シンポジウム：知識偏重社会への警鐘—「知らない」のパフォーマンスが未来を創る—(ZOOM開催)	パフォーマンスの意味について、複数研究領域での意味、パフォーマンス心理学が従来の心理学に対して持つインパクト、最近茂呂研究室で行った研究事例を紹介することで明らかにした。
11 パフォーマンスのインパクト	単著	2021年2月7日	国際ワークショップ『ロイス・ホルツマン博士と語る「共生と発達のアート：パフォーマンス心理学」』科学研究費基盤C「貧困の子どもの支援を旨とした公私空間を橋渡しする第3空間の探索的開発」(2018～)代表茂呂雄二	科研の成果報告の一環としてLois Holzman博士(East Side Institute for Short and Group Psycho-Therapy 所長)をオンラインで招聘し開催した国際ワークショップでパフォーマンス心理学の意味について議論した。
12 ソーシャルセラピューティクスとアクション	単著	2021年11月21日	日本アクションメソッド普及協会 秋大会 in ZOOM	この発表では、ソーシャル・セラピューティクスの考え方と実際のアクションの事例について話す。ソーシャル・セラピューティクスは、診断名や医学医療モデルに頼らない、グループによる実践を中心としたもので、セラピーというよりも、共同のコミュニティー作りを通して人生をベタリングするアートと言える。
13 パフォーマンス心理学の拡張：ウイトゲンシュタインの像・想像・臨床	単著	2022年1月9日(日) 13:00-15:00 ZOOM	認知科学会 教育環境のデザイン分科会 (DEE) 研究会	この10年ほどパフォーマンス心理学とソーシャルセラピューティクスを紹介したり実践したりしてきた。この発表では、パフォーマンス論が、状況論や活動論に対してどのようなインパクトを持つのかについて再度考えてみたい。パフォーマンス心理学のアイディアの一つの源泉は、ウイトゲンシュタインである。2000年代以降、さまざまな読解の精緻化や解釈の提案が相次ぎ「新しいウイトゲンシュタイン」像が用意されつつある。この新しい像は、パフォーマンス心理学・ソーシャルセラピューティクスの意味をさらに明確化するきっかけとなることが期待できる。それとともに、新しい議論テーマが提案されずに停滞気味に映る、状況論と活動論に対しても、非常に強いエンジンの役割を果たすに違いない。
14 心理学の夜明け：ウイトゲンシュタインの思想を手がかりにして	単著	2022年2月27日(日) 10時—12時 ZOOM開催	講演会「新しい心理学とウイトゲンシュタイン」	心理学がどのような像にとらわれていて、ウイトゲンシュタインの思想が心理学(者)をそこからどのように自由してくれるのか。加えて、ただ自由にするだけではなく、「新しいウイトゲンシュタイン」に基づいて新しい心理学を創造できることを、新しい状況論(パフォーマンス心理学など)を例に示す。
15 みんなで楽しく発達するパフォーマンス心理学入門	単著	2022年2月5日	2022 東京未来大学 モチベーション研究所 第17回フォーラム	パフォーマンス心理学の基本的な考え方を、いくつかの事例を通して示した。
16 もう一つの対話主義：ウイトゲンシュタインのパフォーマティビティー	共著	2022年11月26日	日本認知科学会 DEE 研究会	茂呂雄二(東京成徳大)・新原正義(帝京大)・永岡和香子・北本遼太(浜松学院大)・岸磨貴子(明治大)・Lois Holzman (East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy)との共著。パフォーマンスアプローチ心理学のソーシャルセラピューティクスが、ウイトゲンシュタイン

				ンの言語像批判による会話の延長を目指す活動であることを論じた。
17 若者が直面する社会的困難さをパフォーマンス心理学から支援する	単著	2022年12月18日	臨床発達心理士会全国資格更新研修会	パフォーマンスアプローチ心理学の観点から、貧困やヤングケアラーなどの、若者が現代社会において直面するさまざまな心理的課題について論じた。
18 パフォーマンス・アプローチ心理学：発達の意味・心のアートの意味	単著	2023年3月3日	日本発達心理学会ラウンドテーブル 3PM2-H-RT07 『パフォーマンス・アプローチ心理学に基づく研究と実践：「心のアート」としての心理学とはなにか』	パフォーマンスアプローチ心理学の背景と自然科学批判の意味、アートとしての活動のヒッツ養成について論じた。

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。